

社会科

山 岸 郁 生
寺 岸 和 光
基 村 俊 成

1 社会科における「創発の学び」とは

社会科とは

社会科とは、身の回りにある様々な事象を通して、人の営みの意味や働きをとらえていく教科であるといえる。それは、「社会の一員としての自覚を持つこと」であり、社会集団を構成する人の意思に触れ、意思を理解し、帰属意識を持つことを意味している。その際、集団で学ぶという相互作用によって、子どもは一人一人の見方・考え方を重ね合わせ、より広い視野や多様な視点でとらえていくことができるようになる。このような集団の学びによって、結果的に子どもが人の営みにある思いや考えに気づき、寄り添い、たどることができると考えている。

そこで、社会科における「創発の学び」を次のように定義した。

社会的なものの見方・考え方を重ね合わせることを通して 人の営みにある思いや考えをたどっていくこと

「重ね合わせる」には二つの側面がある。一つは、様々な事象や人の営みにある見方・考え方と子どものもつ見方・考え方との重なりであり、もう一つは、子ども相互の見方・考え方の重なりである。

「人の営みにある思いや考え」は、人の営み自体の存在、その営みが生まれる理由や原因、そして、その営みが有している価値など、包括的な理解を前提としている。

2 社会科における「学びを深めようとする思い」とは

2つの「学びを深めようとする思い」

社会科における「学びを深めようとする思い」は、問い合わせに対する自分なりの答えを求めるようとする態度や、より多くの事象や知識を理解していくようとする意欲の表れを単に指すものではない。個別の事象や知識はあくまでも学びの起点であり、それらのつながりを見出し、より多面的に、また構造的に事象をとらえていくようとする見方・考え方を育んでいく必要がある。そのためには、個別の事象や知識から新たな価値観を導き出すための「学びを深めようとする思い」を子ども自身が意識していくことが大切である。

そこで、社会科における「学びを深めようとする思い」を、以下の2つであると考えた。

(1) 社会的なものの見方・考え方を重ね合わせようとする思い

- ・吟味した資料や取材を通して調べようとする
- ・人の工夫や苦労に着目しようとする
- ・多様な見方・考え方を得ようとする

(2) 人の営みにある思いや考えをたどろうとする思い

- ・自分で体験しようとする
- ・注目した立場に立って考えようとする
- ・社会をよりよくしていく願いから発想しようとする

この2つの思いを意識化することによって、創発の学びの質を高めることができるのではないかと考えている。

3 「学びを深めようとする思い」を育むために

(1) 「社会的なものの見方・考え方を重ね合わせようとする思い」の意識化を図る

①人の営みが見えるような素材の選択

事象との出会いにおいては、まず、子ども一人一人が、自分のくらしとのかかわりに気づくことができるような素材を取り上げる。子どもにとって身近に感じられるもの、追求することで人の営みが見えてくるもの、その人の営みと自分のくらしとのかかわりがあるものなどである。その上で事象に意欲的に働きかけることができるよう、単元導入時において、事象との出会いの場を工夫する。驚きや感動、意外性のあるグラフや写真、年表などの資料や実物を提示することにより、問題意識や目的意識を持たせることができる。

②単元構成に位置づける複線的な学習

一人一人の問題意識を出し合う中で共通点を探り、課題を絞っていく。これは集団としての課題の共有を図ることである。このことは、一人一人の問題意識を集団に広げるとともに、問題意識を追求意欲に発展させるためのものもある。

調べ学習にあたっては、子どもの多様な思いや願いに応えるために、複線的な流れを意図的に取り入れていく。そうすることで、一人一人、あるいは小集団が興味・関心を持つ事象や課題や学習方法などを選択でき、より主体的な学習につながるであろう。

③思いや考えを書き表す場の設定

自分の見方・考え方を明確にするために、事象に対する予想や仮説をもたらせた後、学習のめあてや計画などを明確化していく。そして追求過程のポイントごとに、自分の考えや行動、追求方法のふり返りをノートやカードなどに記録する。その際、言葉だけでなく、図やイラストも活用させたい。また、だれのどのような意見で自分の考えが変わったり、よさに気づいたりしたかについても記述させ、相互評価に生かしたい。

④考えを重ね合わせる場の設定

社会的なものの見方・考え方を深めていくためには、他の見方・考え方を重ね合わせる場の設定が必要になる。例えば、互いの考えを発表し合う場、ディベートや討論の場、ワークショップやポスターセッションの場などが考えられる。ここでは単なる意見交流だけでなく、一人一人の学習過程をも明確にすることによって、お互いの見方・考え方のよさに気づくことができる。この重ね合わせる場を通して得た多様な意見や学習方法を生かして、一人一人の考えをさらに深めていきたい。また、教師のゆさぶりの発問や、新たな事実を示す資料の提示なども効果的である。

(2) 「人の営みにある思いや考えをたどろうとする思い」の意識化を図る

①人と出会う場の設定

事象に携わる人と出会い、直接話を聞いたり、自分の考えを確かめたりすることを通して、その人の思いや考えに触れることができる。自分たちの思いをかかわらせながら学習を進められるように、人と出会う場を単元の中に位置づける。その際、出会った人の願いや苦労や工夫など多様な視点をもたせることによって学習をひろげ、人の営みを多面的にとらえられるようにしていく。人の生き方への共感を通して、社会の一員となっていく思いが育まれるのである。

②体験的な活動の場の設定

体験的な活動を取り入れることによって、自分と社会のつながりを意識しながら事象に関わっていくことができる。それによって、人の営みにある具体的な願いや苦労や工夫に気づき、人の営みの意味や働きを考えいく起点となっていく。

③未来について考える場の設定

人の営みの中にある思いや考えをたどっていく中で、事実を認識するだ

くらしとの
かかわり

問題意識や
目的意識

課題の共有

主体的な学
習

めあてや計
画

相互評価

ゆさぶり

生き方の多
面的なとら
え

自分の生き方	けでなく、社会の一員としてよりよい未来を積極的に構想し、実現していくとする思いをもつ場の設定をする。これは、自分を社会的な事象に携わる人の立場におくことによって、社会の一員としての自分の生き方を見つめることにつながっていく。
(3)子どもの見取りを生かす	<p>①焦点化するよさの解釈</p> <p>「学びを深めようとする思い」のよさは、既習事項や学級の状況によってその内容が異なってくる。学級づくりが重要な時期では社会的側面の見取りが重要になるだろうし、授業のねらいに迫るような認知的側面にかかる思いも、次時へのきっかけなのか、次単元で生かすのか、半年後の学びにつながるのかといった教師の見通しをもとにした見取りが重要になる。子どもが表出する思いのよさは多様な解釈が成り立ち、どのよさに焦点化するのかという教師の判断が絶えず意識されている必要がある。</p>
焦点化するよさ	<p>②フィードバックの場の選択</p> <p>「学びを深めようとする思い」のよさがフィードバックされていくには教師の働きかけが不可欠ではあるが、子どもの間で互いに認められ、そのよさが学級全体に共有化されていった経験は、子どもにとって思いのよさを内面化していく上で効果的なきっかけになる。教師から子どもへというパターン化されたフィードバックのあり方ではなく、子どもから子どもへ、集団から個へ、個から個へというように多様な場が考えられる。子どもの見取りを生かして場を選択する意識が大切である。</p>
場の選択	<p>③内面化されたものの見取り</p> <p>子どもに内面化された事柄を教師が明確に把握することは容易ではない。いくつかの知識を得て、それらをつなげて説明する程度の場合も少なくない。そこで内面化されたものを見取るためのさまざまな工夫が教師には必要になる。例えば、全体像と関連させる、他との違いに着目する、時間的な経過で追う、仕組みで説明する、他の事例に置き換えるなどの枠組みを与えて表現されることである。子どもに内面化されたものがより見えてくることによって、教師は自らの働きかけを選択しながら子どもの思いのよさをさらにとらえるようになっていくのではないかと考えている。</p>
内面化されたものの見取り	

4 実践例 －3年－

(1) 小単元名 KANAZAWAって、こんなとこ！

- (2) 目標
- ・自分の住んでいる地域について調べることから市の様子について関心をもち、進んで考えたり、調べたりすることができる。
 - ・地域の様子が場所によって違うことを、特色ある地形や土地利用の様子 大きな建物の場所、交通の様子などの面から考えたり気づいたりすることができる。

(3) 指導にあたって

① 教材のとらえ

本小単元は、「学校のまわり」の学習の後を受けて、視点を市全体へと広げる単元である。市には平地や山地、海に面したところなど、さまざまな土地の様子が見られる。人々はその土地の条件を生かして住宅地や商業地、田畠や森林などに利用して生活している。子どもは日頃、何気なく市の様子を見ているが、土地の様子や人々の様子を考えることはない。また、市の様子と言っても人が住んでいる一部しか行ったことがないだろうし見たこともないであろう。

そこで本単元では、それぞれが家の回りの様子を持ち寄ることから学習を進めたい。そしてできあがった地図から、残りの部分の様子を予想したり、実際に見学したりして調べていきたい。そうして金沢市の土地利用の様子を知り、市の人々が土地の条件を生かして生活していることにも気づかせていきたいと考えている。

② 本小単元における「学びを深めようとする思い」

ア 社会的なものの見方・考え方を重ね合わせようとする思い

- ・自分の住んでいる地域の様子を調べ、それについて多様な見方、考え方を得ようとする。
- ・自分の住んでいる地域と金沢市全体の様子をつなげながら、自分にない考えを生かそうとする。

イ 人の営みにある思いや考えをたどろうとする思い

- ・金沢市の様子について調べることから、市の人々が土地の条件を生かして生活していることに気づいていこうとする。
- ・自分の住んでいる地域や市の様子を調べることから、自分の住んでいる地域や市に関心を持ち、進んで地域をよりよくしていこうとする。

③ 「学びを深めようとする思い」を育むために

子どもは、4月から社会科の学習を始めた。その中で、「社会科って楽しいな」「調べるって面白いな」と感じてくれる子が少しずつふえてきた。それは、学校の周りの様子についての学習が見学や作業を中心とした学習で、生活科での体験が生かされる機会が多くなったことが影響している。例えば、中学校の屋上に上ったり、実際に学校の周りの様子を見学して調べたり、大きな地図にまとめたりと、体験的な学習が多く取り入れてきたからもある。そこでは、積極的に活動する姿は見られるようになってきた。しかし、自分なりの思いを持つことについては、まだできない子が多く、全く思いつかないという子もいる。また、社会的な物の見方・考え方についても十分に身に付いてきているとは言えない。

そこで、本単元では、以下のような手立てをとりながら、学びを深めようとする思いを育んでいきたい。

<人の営みが見えるような素材の選択>

まず、事象との出会いにおいて自分のくらしとの関わりに気づくことができるよう、自分の住んでいる地域から学習を始めることにした。子どもにとって自分の住んでいる地域は身近すぎて見ていないことが多い。しかし、学校の周りと比べてみることで自分の住んでいる地域の様子を再認識できるのではないかと考えた。また、そこからの方が自分なりの思いを持ちやすいとも考えている。

<思いや考えを書き表す場の設定>

自分の思いや考えを明確にするために、単元のポイントごとに自分の考え方や振り返りなどをノートに記入させていく。その際に、学校の周りの学習でもしたように、地域の様子を色でとらえさせたりもしていくことで自分の思いが周りの人にもわかるような工夫ができる場を与える。そうすることで、自分や相手の考え方の変化やよさにも気づいていくことができる」と考えている。

<考え方を重ね合わせる場の設定>

考え方を重ね合わせるためには、お互いの思いや考えを発表し合うことが大切である。また、相手の意見にとらわれない、自分なりの考え方を発表することも大切である。そのために、自分の思いや考えをそのまま発表することだけでなく、書かせてから発表することにも取り組んでいきたい。そのことでより自分の考え方だけでなく、考えた根拠や調べたことなども重ね合わせができ、共有することができると考えている。

<体験的な活動の場の設定>

市全体の様子を調べるとなると、どうしても本や写真などの印刷された物で調べる活動が多くなる。そこには直接的な調べ活動とのギャップがあり、学びを深めようとする思いは育まれないであろう。そこで、市全体は無理であるが、バスによる市縦断の見学を設定し、土地の様子だけでなく、建物や住んでいる人の様子までも見せることにより、より人の願いや工夫に気づくことができる」と考えている。また、そのことが人の営みの意味や働きを考えていく上でも大切なことであろう。

<未来について考える場の設定>

社会の一員としての自覚を大切にするために、単元の終わりに金沢市の未来の様子について考えさせる場を設ける。3年生の段階でどれだけ見通せるかわからないが、3年生なりの思いを持って考えることができれば、学びを深めることができたと考えて良いと思っている。

(4) 単元計画 (総時数 10時間+課外)

主な活動と内容	評価のポイント
1 市の様子について関心を持ち 調べてみようとする意欲を持つ ・学校の周りの様子はどうだったかな ・学校の周りにはいろいろな町があったな ・もっと向こうにはどんな町があるのかな? ・わたしたちが住んでいるのは金沢市なんだよ 金沢市って どんな町かな	市の様子について関心をもちしらべようとすることができる
2 市の様子について調べ 土地の様子がわかり 自分なりの思いを持つ <金沢市の様子を調べる計画を立てよう> ・まず 自分の家の周りを調べよう <自分の家の周りを調べてこよう> ・有名な場所や建物は 家は多いかな ・田圃や畑はどうかな 店も多いかな ・僕の家の周りは「□□□」なところだったよ <調べたことを持ち寄って金沢市が見えてこないかな> ・泉野や緑が丘のあたりは 百坂のあたりは <金沢ってどんな所っていえるのかな> ・でも まだまだ調べてないところが多いよ ・学校の周りの時と同じように見学に行けないかな <金沢市縦断バスで見学に出かけよう> ・バスに乗って 海から山まで見てこよう ・たくさんわかったぞ ・まだ、調べてないところもあるよ <地図の白い部分を本などで調べよう> ・「のびゆく金沢」の地図や資料などで調べる ・金沢の様子がわかったぞ 北の方は 南の方は 東の方は 西の方は	市の様子について調べる方法を考えることができる
3 市の様子についてわかったことや未来への思いをまとめる <わかったことから大人になった時の金沢について考えよう> ・「△△△な金沢になっていてほしいな」 ・パンフレットにまとめよう。	市の様子について地形や土地利用などと結びつけてまとめることができる 市の未来への思いを自分なりにまとめ パンフレットに表現することができる

☆自分の家のまわり調べ(校区)
ちょうさんとう()組()

目立つたるもの	有名な場所	多い物 家・田畠・店	道路	人通り	そのほか気がついたこと

資料1 家の周りを調べる用紙

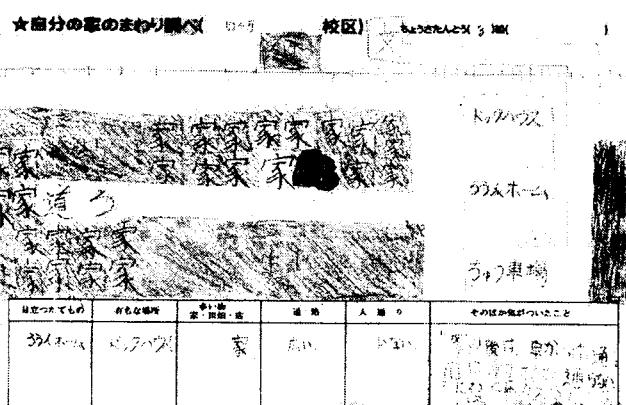


写真1 実際に記入した用紙1

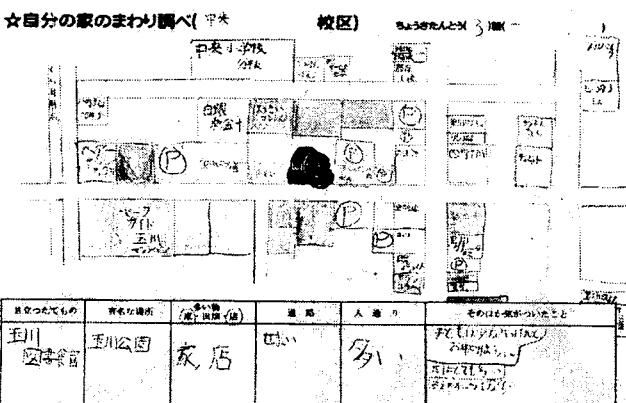


写真2 実際に記入した用紙2

(5) 本単元における授業の実際と考察

① 人の営みが見えるような素材の選択

市の様子を調べる計画を立てる段階では、学校の周りの学習の時と同じように様々な方法が出てきた。それらの中から実際に探検して調べる方法をとることにした。それは、実際に様々な土地の様子を調べることでその土地に住んでいる人々の生活が見えるからである。とくに本校の子どもは、市内全域から通学している。そのため、学校の周りを学習することが自分の住んでいる地域の学習と同じにならないということがある。しかしそれを逆手にとって、市全体の学習の際には生かすことができると考えた。

子どもは週末を利用して、自分の住んでいる地域の様子を調べてきた。その際には、学校の周りの学習の時と同じように家やマンションは赤に、田畠や公園などは緑に、店を黄色に塗って調べることにした。また、周りの様子だけでなく、目立つ建物や有名な場所、人通りなど市全体の様子につながることも記入する欄を設けた(資料1)。

学校の周りの学習と同じように書くことにしたため、どの子も大変よく調べることができていた(写真1、2)。地図に調べたことを記入するだけでなく、言葉でも書かせたことで、家の周りの様子で今まで気づかなかつたことに気づくこともできていた。また、「生活しやすい」「ホタルがいる」「かえるがいっぱいいる」などの言葉から、住んでいる地域への愛着も持てるようになってきたと考えた(資料2)。

これらのことから、事象との出会いにおいて自分の住んでいる地域を取り上げたことは人の営みという視点を持つ上でたいへんに役に立ったと考えられる。

- いつも見ているのにけっこうしらない所があってびっくりした。思ったより畑とぶどうやさんや会社がいっぱいあった。
- お年が多い。犬がいっぱいいる、みそにはザリガニはカニがいた。
- 野町駅のまわりにお店があつまっていた。
- 用水路の西がわは野々市町だ。広い道路の左がわは店が多い。スーパー ゆうびんきょくが近いから生活しやすい。
- ホタルがいる。家がいっぱいいたっている。新しい家がふえてきた。
- 公園が5こもある。家から2分で用水につく。近くにあさの川がある。
- 家の後ろは、車がいっぱい通って。前は車がぜんぜん通らない。にわにはかえるがいっぱいいる。
- ねこが多い。朝と夕方は、車の通りが多くなる。平和町方面に行くのに車が通れない坂がある。

資料2 気づいたことの内容

② 思いや考えを書き表す場の設定

本単元では、自分や相手の考えのよさに気づいたり、自分の考えの変化に気づくことができるよう、自分の思いや考えをノートに書き表す場を設けた。一つ目は自分の家の周りの様子を発表していく場面で、市の様子についての思いを書き表すことをさせてその変容を見ることにした。また、バスでの市の見学を終えた場面でも市の様子に対する思いをノートに書き表すことをさせた。

また、自分の考えをしっかりと持つことを大切にした。そのために授業の始めや終わりに自分の考えを書く時間を設けた。それで子どもが自分の意見をしっかりと持つことができ、さらにはその考えを発表しやすくなると考えた。

書く時間は5分～10分を目安としてとしたことにした。最初は書くことにだいぶ時間がかかっていたが、徐々に書くことにも慣れ、書くための時間は短くなっていた。また、書く内容についても特別に指定するようなこともなく、自由に思ったことや考えたことを書かせた。その結果、ノートには「ドキドキしてくる」「まだ発表していないのでがんばるぞ」「こわい所だと思います」など、様々な自分の考えが見られるようになってきた(資料3)。

- ・どまん中に田畠がないということを言ったけれど、ぼくのすんでいる町のまわりがぜんぜん田畠がないのはなぜかなと思った。
- ・この前はみんなで町たんけんをしてせいいっぱいだったけど、もっといっぱい町はあるから、そう思うとドキドキしてくる。地図を見てぼくたちはいっぱいの町をしらべたんだ。すごいと思った。
- ・山が家より多いような気がします。食べ物を買う店が何で少ないんだろうなと思います。だんだん金沢市の地図に近づいてきたな。まだ発表していないのでがんばるぞ。
- ・金沢市にはぼちがいっぱいあるし、家の近くには4か所もぼちがあるから、金沢市ってこわい所だと思います。
- ・とても人が多くて、家がたくさんある。しぜんも多くていいところだと思いました。みんながぬった地図を見ると1番多そうのが家だとわかって、山、田、畠もあるからしぜんも多く、人も多いからです。

資料3 ノートに書かれていた内容

③ 考えを重ね合わせる場の設定

考えを書き表すだけではなく、書き表した考えを発表し合うことで重ね合わせる子とが大切である。そのために、お互いの考えを発表し合う場を設定した。

まず、調べたことをまとめた地図(写真3)を見ながら「金沢市ってどんなところかな」ということを書き表す時間をとった。子どもは、自分の調べたことや今までに発表してきたことをもとにしながらノートに書くことができた。

その後の発表では、始めに書き表していたために「家が多くて店が少ない」「畠が多い町」「おもしろ



写真3 自分たちが調べた市の様子



写真4 考えを発表する様子

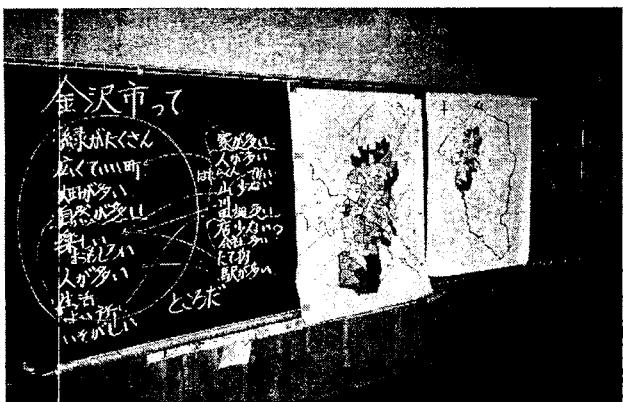


写真5 授業での板書

いところ」「いそがしいところ」など様々な考えが出てきた(資料4)。

しかし、それらの発言はつながりがあまりないものとなってしまった。それは、書いてしまったから変えようがなかったこともあるだろうが、一人一人の考えを全体へ広め、共有化していく教師の支援が足りなかつたこともある。

そのためには、見方や観点を明確にするような板書をしていく必要があった。また、発言内容について子ども同士のかかわりが不足していたので、一つ一つの発言にかかわりが持てるような働きかけが必要であった。

そうすることで、子どもの考えが共有化され、社会的な見方・考え方を重ね合わせることにつなげていくことができると考える。

- ・緑がたくさんある市だと思います。
- ・家がいっぱいあって広いいい町。
- ・家が多くて店が少ない。山が多い。人が多い。
- ・あんまりにぎやかじゃない、家が多いところ。
- ・畠が多い町。
- ・金沢市って自然などころ。
- ・山も川もあるから楽しいところ。
- ・おもしろいところ。なぜかというとおみせも川もあるから。
- ・自然が多い。地図をまとめてみたら田も多いから。
- ・田畠が多いから、生活しやすいところ。
- ・家が多いから、人が多くていいところ。
- ・いそがしいところ。それは店や会社がいっぱいあるから。
- ・いい町だと思う。人も多いし、店もいろんな所にある。野田山もあって自然とふれあえる

資料4 子どもの発表内容

④ 体験的な活動の場の設定

市全体の学習のように、直接見学することが難しい学習では、どうしても資料に頼った調べ活動になってしまい、子どもの興味も薄れがちになる。そこで、バスによる市の縦断見学を実施して、少しでも人の営みや願いに気づいていってくれたらと考えた。

バスが山地の方へは向かえないことになり、縦断見学ではなく、西部から東部への横断的な見学となった。コースは次の通りである。

学校出発後、一路北西にバスを走らせ、西部の田畠が広がっている様子や住宅団地の様子を見学した。次に金沢港で説明を聞き、海に面していることを確認した。さらに北部の田畠や住宅を見学した後、東部の山地に入った。トンネルを抜けたりしながら大学のキャンパスへと向かった。山がさらに続いていることを確認した後、浅野川、犀川を渡り、小立野台地、寺町台地を通って学校まで帰ってくるというコースであった。



資料5 見学に使用したしおり

北西に進んでいる場面では、土地がだんだんと低くなっていくのを坂道を下っていくことでとらえることができた。また、道の両側に商店が並んでいる商店街の様子や、市の中心部に大きなビルが立ち並んでいる様子も見ることができた。さらに高速道路を越えると急に建物が少なくなり、田畠が増えてくるという土地利用の変化にもしっかりと気づくことができた。

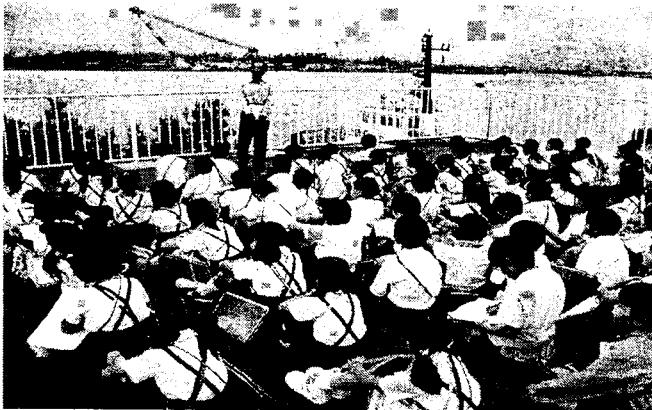


写真6 港で説明を聞く

ができた。子どもは、港の場所が以前には水田だったことを聞き、驚いている子が多くいた。また、雪害への備えからこの港がつくられた話には関心をもって聞いている子も多かった。

北部の田畠の様子では、西部と同じように見渡す限りの水田を見て驚きの声を上げていた。「木越、瑞樹団地」では、「みどり団地」との違いを見ることができた。「木越・瑞樹団地」では、アパートではなく一戸建ての住宅が並んでいた。ここでも高速道路を越えるとやはり急に家や商店が多くなっていることに気づいていた。

東部の山地では、山地が続く際を道路に沿って移動した。バスの窓から見る山だけではその向こうにも山が続いていることが分かりにくい。そこで外回り環状線の「卯辰トンネル」を通ることで山を越えて移動した。トンネルに入る前に山の方へ向かったとき既に、山が続いている様子が少し見えた。さらにトンネルを越え、向こう側へ出たときにも山が川に沿って続いている様子を見ることができた。そこからさらに山を登り大学のキャンパスに出た。そこはもう山の中で、どちらを見ても山しかなく、さらに奥の方まで山道が続いていた。

帰りには、二つの川と台地を通った。浅野川を渡り、小立野台地へと上った。台地を降り、犀川を渡った。そして学校のある寺町台地へと再び上ってきた。金沢という土地の特徴がはっきりと体験できた。子どもは、上っては降りる様子にバスの窓から、前や横、後ろを見比べていた。

この体験で、子どもの金沢市に対する思いは資料6にあるとおりである。これらを読むと、人の営みとつながった意見や、人の営みをもとにした意見も出てきている。以前の学習をもとにした意見もあり、学習の積み重ねが見られた。

- ・トンネルがあるわけは、山をとおると、時間がかかるから。
- ・田がたくさんある所は、ほかの物がないから、一つの物があったら、ほかの物がないのに気づきました。
- ・学校のまわりは家が多いけど、港会館の所は店も家もぜんぜんなかったからびっくりしました。
- ・橋のようになっているところが2つありました。橋の下は何かせんろや川が通るためにあった。寺町にはその名の通りお寺がいっぱいありました。暮らしやすくするために、いろいろなくふうやたてものがありました。
- ・せまい道は車が少ないけど、大通りには車が多かったです。
- ・前の勉強で「田が先にあって、家があとにできた」と言うのを思い出して、みなと会館は昔は田んぼだったので、やっぱり昔は田んぼが多かったんだなと思いました。
- ・平地は家が多かった。みなとの海をまっすぐに行くとロシアに行ってしまう。台地をこえたら川があった。山が見えなくなってくると店が多くなってきた。
- ・みどりには、田畠が数え切れないほどあり、そのよこは家がたっているところが多いと思いました。

資料6 見学のまとめのノート

⑤ 未来について考える場の設定

社会の一員としての自覚を促すために、单元の終わりに金沢市の未来について考える場面を取り入れた。そこでは、3年生なりの考えで自分たちが調べた市の様子が、自分が大人になったときにどうなっていてほしいのかを考えさせた(資料7)。

西部方面では、水田が広がっている様子を驚きを持って眺めることができた。日頃このような光景を見ている子は少ないのであろう。また住宅団地の中を通ったときには、道の両側に続くアパート群にも驚きの目を向けていた。そして「みどり団地」の「みどり」が周りの水田の様子からきていることに気づいている子もたくさんいた。

金沢港へ向かう道では、工場や倉庫が見られるようになってきた。「金沢みなと会館」では、館長さんから港のことだけでなく、金沢と海とのつながりについても話を伺うこと

- ・もっと店が多くて、にぎやかな町になってほしい。
- ・自ぜんが今もたくさんあるけど、未来にもたくさんのかつていてほしい。
- ・家や店が、たくさんになって人もたくさんすんでいる町になってほしい。
- ・もっと山とかをくずして、家をたくさんつくってほしい。人がたくさんすむことができるよう。
- ・店や家がもっと多くなって、たくさんの人人がいて、にぎやかになってほしい。
- ・かわらなくて、今のままでよい。

資料7 未来の金沢について

子どもは、それぞれの思いで市の未来について考えていた。しかし、社会の一員としての自覚につながるような思いはあまり表れてはいなかつたが、そこには自分なりの思いがしっかりと表れていた。

たとえば、「かわらなくてよい」と書いた子の中には、二通りがあると考えられる。一つは、ただ単に、このままが一番だと思っているという消極的な意味での不变を考えている子である。もう一つは、今の市がとてもよい感じで、少しの変化はあるだろうがあまり変わっていて欲しくないという積極的な意味での不变を考えている子である。

また、「もっと山とかをくずして、家をたくさんつくって...人がたくさんすむことができるように」と書いた子は、人口が増えれば、当然たくさんの家が必要となる。そのためには山を崩して家を建てなければならないということが、分かっている子である。つまり、社会の一員としての自覚が少しずつ育つてきているといえる。

さらに、「未来にも(自然が)たくさんのかつていてほしい」と書いた子は、自然環境に目を付けており、環境問題に対する関心が高いのであろう。その思いをこれからも持ち続けていくことで、社会の一員としての自覚につながっていくことが期待される。

(6) 単元を終えて

本小単元における「学びを深めようとする思い」は二つあった。

実践を通して、社会的なものの見方・考え方を重ね合わせようとする思いについては、実際の授業でそのような場面を作り出すことができた。そして、それぞれの子どもの中には、多様な見方や考え方方が生まれてきているように思えた。それは、ノートの記述に友達の意見で考え方方が変わったというものがいくつか見られるようになってきたからである。また、自分の住んでいる地域と市全体の様子を結びつけることは、この時期の3年生にとって難しかったようで、ほとんど見られなかった。しかし、「学校の周りと比べてみて、どうだったかな?」と発問することで子どもの中に「学校の周りは...だけ」「前の勉強で...」などのように(資料6)比べてみようとする意識が少しずつ生まれてきたようだった。

人の営みにある思いや考えをたどりうとする思いについては、やや難しかったかも知れない。土地の条件と土地利用の様子がなかなか結びつかなかつた。また、たどるということも実感としてうまく表現できなかつた。しかし、自分の住んでいる地域や市の様子には関心を持つことはできた。今まで漫然と見てきた自分の身の回りの様子を見つめ直すことは子どもにとっても新たな発見をもたらし、地域に対する思いが強まったように感じた。また、金沢市ということにも関心が高まり、まだ行ったことのないところについて、どうやつたら行けるのか、どんなところなのかという質問も多く出てきた。これらのことと繰り返していくことで、今後思いや考えをたどることもできるようになっていくと考える。

これら二つの思いを育むために、いくつかの手立てをとってきた。人の営みが見えるような素材の選択や体験できる場の設定はたいへん有効であると考えられる。しかし、思いや考えを書き表す場や、それを重ね合わせる場の設定では、教師の支援がたいへん大切であるということがはつきりとした。本単元では、それが足りなかつたことが問題であった。今後、どんな支援が必要であったのかをしっかりと考えていく必要がある。

また、「学びを深めようとする思い」のよさをどうとらえるのかも難しい問題であった。よさがはつきりしていなかつたということは、それをどうフィードバックしていくのかもはつきりできなかつたということである。このことも今後の課題である。

今後これらの課題を一つ一つ解決しながら実践を積み重ねていきたい。

実践例 －4年－

(1) 小単元名 くらしの中の水

- (2) 目標
- ・飲料水の確保の事業が組織的・計画的に進められていることを理解し、それらの事業によって、地域の人々の健康な生活の維持と向上が図られていることを考えることができる。
 - ・飲料水を確保するための事業が様々な組織の人々によって計画的・協力的に進められていることに気づき、それらの事業に従事している人々の工夫や努力、願いについて考えることができる。
 - ・飲料水の確保の方法について調査し、わかったことを、絵、文章、グラフなどにわかりやすくまとめることができる。

(3) 指導にあたって

① 教材のとらえ

水は、我々の生活においてなくてはならないものである。日常生活を見わたしても、飲料や洗面、炊事や洗濯、トイレおよび入浴など、ありとあらゆる場面において使われている。しかしながら、我々はその使用において、水が大切であるという意識をもつことはあまりない。おそらくそれは、蛇口をひねりさえすれば、清潔で安全な水を、いつでも必要なだけ手に入れることができるからであり、それがあたりまえの感覚になっているからであろう。

本小単元では、このあたりまえになっていることが、実は人々の願いにもとづき計画的に行われていることに気づくことが大切であると考える。そのことが、自分たちが健康な生活をするために働いてくれている人の存在を浮き彫りにさせてくれるからである。そして浄水場では毎日金沢市全体で約17万m³という大量の水を供給するため、多くの人々が日夜休みなく働いている様子を学んでいく中で、自分たちが利用する水の量や使い方にも意識が及んでいくものと考える。

② 本小単元における「学びを深めようとする思い」

ア 社会的なものの見方・考え方を重ね合わせようとする思い

- ・水にかかわる自分たちの生活を振り返りながら、飲料水を確保するための事業について進んで調べていこうとする。
- ・飲料水を確保するための事業に従事している人々の工夫や苦労、願いなどについて考えていこうとする。

イ 人の営みにある思いや考えをたどろうとする思い

- ・自分たちが使っている水についての关心を深め、水を大切にしていこうとする。

③ 「学びを深めようとする思い」を育むために

子どもは前単元で長坂用水について学習してきた。学習当初は、長坂用水が学校のすぐ近くを流れているにもかかわらず、その存在にすら気づいていない児童もあり、興味も今一つだったように思う。しかしながら用水のようすやそのはたらきを調べていくうちに关心も高まっていった。子どもにとって調べることは楽しいことなのである。

ただ、調べることが単に資料等を書き写すことになっていて、まとめることが苦手である児童が多い。事象や知識の理解だけにとどまり、自分の考えをもつて至らない児童も見られる。また自分の考えを発表することはできても、友だちの意見とつなげて考えたりすることもまだまだ難しいようである。

そこで本小単元では以下の手立てを取りながら、学びを深めようとする思いを育んでいきたい。

＜人の営みが見えるような素材の選択＞

本小単元で取り上げる水は、我々の生活に必要不可欠なものではあるが、あまりにもあた

りまえの存在であるがゆえに、子どもの意欲や追究心を引き出し主体的な学習活動につなげていくためには、その提示の仕方に工夫が必要であると思われる。日常生活をふり返りながら我々が水を使っている場面をていねいに取り上げたり、また実際に水の量を測ってみる活動を取り入れたりしながら様々な角度から切り込み、子どもの学習への意欲や追究心を喚起していきたい。

<思いや考えを書き表す場と考えを重ね合わせる場の設定>

水について、我々は普段どれくらい使っているのか、どのように水がつくられ我々のもとに送られてくるのか、水源を守るためにどんな活動が行われているのか等、具体的な事実を丹念に調べていくことはもちろんあるが、調べたことにより自分の見方や考え方がどうなったかを常に意識させていくために、予想や調べ方、調べた結果など丁寧に記録させていきたい。そうすることで、事象に対する自分の考えが明確になっていくものと思う。

さらに、子どものかかわりを大事にしていきたい。子どもは、学級や学年、学校という社会において、子ども相互や教師とかかわり、それぞれのよさを学んでいく。相互に考えを発表していく場を適宜設定していくことで、一人一人の考えを深めていきたい。

<人と出会う場の設定>

自分が調べたことや調べた事実から自分が考えたことを確かめるために、浄水場で働く人に話を聞く機会を設けたい。浄水場で働く人の願いや苦労、工夫などに触れることで児童の事象に対する見方や考え方がより多面的になっていく。また、薬品ができるだけ使わずにより自然に近い水を供給するために、休日にボランティアで水源の川のそうじをしている話などを聞くことによって、自分たちが使っている水への関心を深め、水を大切にしていこうとする思いを育んでいきたい。

(4) 単元計画（総時数10時間）

主な活動と内容	評価のポイント
<p>1 私たちが普段何気なく使っている水道水について考える <外国の水事情と自分たちの生活をくらべよう> ・水道がない国もあるんだ ・水汲みのために3kmも歩くなんて ・水汲みが子どもの仕事？！ <私たちはどんなことに水を使っているのだろう？> ・のどがかわいたときに飲む ・顔を洗ったり歯を磨くときに使う ・トイレでも使っているよ ・そうじや洗濯やお風呂にも使っている ・ずいぶんたくさんのことを使われているね ・いったいどれだけの量の水を使っているのかな ・1人あたり1日〇〇ℓ使っている ・金沢市全体では1日〇〇ℓだね ・これだけたくさんの水はどこからくるのかな</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 自分たちの水にかかわるくらしをふりかえり くらしを支えている水について関心をもつことができる </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 水の使い方について進んで調べ いかに多くの水を使っているか実感することができる </div>
<p>2 水道水がどこから、どのようにして送られてくるのかについて調べる <私たちが使う水はどこから送られてくるのだろう？> ・海からかな、川からかな ・犀川ダム→末浄水場→野田配水場→各家庭 ・浄水場というところで水をきれいにしているんだ ・どうやって水をきれいにしているのかな ・浄水場の人に話を聞いてみよう <浄水場で水をきれいにしている人はどのような思いで働いているのだろう？> ・使いたいときにすぐに使うことができないところまるでの1日も休むことができない ・飲んだ人が病気にかかったりしないように気をつけている ・私たちのために一生懸命に働いてくれているんだ</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 資料や取材 インタビュー等で水が届けられ処理されるしくみを調べ そこで働く人の工夫や努力について気づくことができる </div>
<p>3 これから水の使い方について考える <水を大切に使うために、自分たちができることは何だろう？> ・水の無駄遣いをしない ・よごさない使い方 ・自分たちのできることからやっていこう</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 水を大切に使うために 自分なりにできることを実行していこうとすることができる </div>
<p>4 学習してきたことをふりかえり、くらしの中の「水」についてまとめる ・「水」についてわかったことを「水の旅マップ」にまとめよう ・できた「水の旅マップ」をお互いに紹介し合おう</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 学習してきたことから自分なりの考えもち それをまとめることができる </div>

(5) 本単元における授業の実際と考察

① 人の営みが見えるような素材の選択

本小単元の指導計画を作成するにあたって、まず考えたことは、我々が毎日使っている水道水について、蛇口をひねれば水が出てくることが、決してあたり前のことではなく、そこには我々の健康な生活を支えるために多くの人たちの働きが存在するということを子どもにぜひ実感してほしいということであった。子どもは、水は生活をしていく上でなくてはならない貴重なものということを頭では理解している。しかしながら、日常生活では、蛇口をひねりさえすれば清潔で安全な水をいつでも必要なだけ手に入れることができることから、水に対する切実な必要感や重要性などを実感する機会があまりなく、したがって、そこに水を供給するために多く人々の存在があるという認識もほとんどないと思ったからである。水を毎日使っている自分たちの生活の営みと同時に、その水を供給するために陰で働いている人たちの営みにも気づいてほしいと考えたのである。

そこで導入において教材との出会い方を工夫し、外国の水事情を取り上げることにした。導入のアプローチの方法としては、我々が毎日どれくらい多くの水を使っているのかを実感させるために実際に自分たちの水の使用量を測ってみたり、水に対する切実な必要感を実感させるために「もし私たちの生活から水道がなくなったらどんな暮らしになるか」を想像させたりすることも考えた。しかし、水道水を毎日我々に供給するために働いている人たちの存在をよりクローズアップしていく方法として、日本とは対照的な水事情をかかえる外国と比較する導入を考えた。外国と比較することで、子どもに日本の水道諸施設の充実ぶりを浮かび上がらせそこから水道事業等に従事している人の営みに着目させようとねらったのである。

授業の実際において、具体的にはネパールの水瓶を取り上げ、以下の三つの活動を行った。

まず、ネパールの水瓶を提示し、ネパールの水事情の紹介をした（写真1）。ネパールでは、今も水道が普及していない地域が多く残り、山間部などでは生活に必要な水を得るために2～3km先のため池へ水汲みに行っている。その際、水瓶を使っている。そしてその水汲みの仕事は主に子どもの仕事であり、そのため学校にいけない子どもが多くいるそうである。授業の話し合いの中で、これらのネパールの水事情を紹介していくと、子どもはかなりの驚きを覚えた様子であった。特に自分たちと同じような年齢の子どもが水汲みをしていることに驚きの声をあげていた。ネパールの水瓶とそれにまつわる水事情を取り上げたことで、水道があるということは決してあたり前ではないことを子どもは理解できたようである。

次に、水瓶に実際に水を入れ、水運び体験を行った。ネパールの子どもたちと同じように実際に水を入れた水瓶を運ぶ苦労を体験してみることで、自分たちが使っている水道の便利さを実感させるのがこの活動のねらいである。水瓶には掃除用のバケツで2杯分（約20ℓ）の水が入り、水を一杯に入れると重さが20kgにもなる。子どもの目の前でバケツから水を水瓶に入れるところに驚いていた。そして教室に水が入ったことに驚いていた。そして教室



写真1 水瓶の提示



写真2 水運びの体験

の端から端まで実際に何人かの子どもに運んでもらったところ、どの子どもも「重い、重い」と顔を真っ赤にして水を運びながら、ネパールの水運びのたいへんさを実感している様子であった（写真2）。

そして、最後に自分たちが1日に必要な水の使用量を予想させ、それがネパールの水瓶で何杯分か換算し直す活動を行った。これは自分が使っている水の使用量がどれくらいなのかを考えさせるとともに、その使用量の多さを具体的な量感として把握させ、自分たちの健康な生活はまさに水道によって支えられていることに気づかせたいと考えて取り入れた。子どもは「料理には何ℓくらい」「洗濯にはこれくらい」「トイレはどれくらい水が流れるのだろう」など、自分の生活経験をふり返りながら具体的に水の使用量を考えていた。予想として出てきた意見は、100ℓ～900ℓと様々であったが、仮に一番少ない100ℓだとしても、水瓶で5回も水汲みにいかなければならぬということになる。ここで「日本では水道から水が流れてきて、それを使っている」「日本は楽と言うか、便利と言うか、贅沢」という意見が出てきた。また、授業後のふりかえりでは、「水の入った重い水瓶を運ぶのがたいへんそう、しかもそれが子どもの仕事なんて、自分ならできそうにない」などの感想に加え「私たちは水道が使えて幸せなんだ」「僕たちは水が欲しい時は水道を使ってすぐに手に入れることができるけれどネパールの人は毎日、何回も重い水瓶を運ばないといけないからたいへんだと思った」等の記述も見られた。水運びの体験と、自分たちの生活にいかに水が必要かということを考えることを重ね合わせることで、普段自分が使っている水道の便利さやありがたさを強く実感させることができたように思う。

以上のような導入を通して、自分たちのくらしの中における水の重要性を再認識させることができた。水について関心を持ち、これから学習していくことを話し合ったときにも「自分が使っている水道の水はどこから来ているのか調べてみたい」等の意欲的な声も上がった。ただ、今回のこのネパールの水瓶を使った導入では、もっとも大きなねらいとして考えていた「我々に水道水を供給するために働いている人の存在」をクローズアップさせていくことについてはあまり充分ではなかった。むしろ、子どもの中には「ネパールになぜ水道ができるのか」「他の外国の水事情はどうなのかな」といった疑問・感想を抱き、教師の意図とは全く逆の方向に意識が流れてしまった児童も数名いた。水道諸事業に携わる人々への気づきに繋げていく工夫が今一つ足りなかつたことも否めない。教材開発のおもしろさと同時に難しさを強く感じた。

② 思いや考えを書き表す場の設定

私たちが毎日のくらしの中で使っている水を、導入では外国の水事情と比較しながら取り上げた。その上で子どもに調べてみたいこととして、自分たちで課題を作らせたところ、主に次の三点について調べていこうということになった。

- 「水道の水はどこから来るのか」
- 「使った水はどこにいくのか」
- 「水は使い過ぎて、なくなることはないのか」

調べ学習に入る際に留意したことは、課題について子どもが資料を調べていき、その資料に書いてあったことを漫然とノートに写すだけの作業に陥らないようにしていきたいということであった。そのための手立てとして二つのことを行った。一つはどの課題に対しても、まず子どもの今までの生活経験をもとに必ず予想をノートに書かせるようにしたことである。このことは、自分の予想が正しいかどうか確かめていくことで、子どもの意欲的な学習につながっていった。もう一つは、調べ活動の後に自分の思いや考えがどのように変わったかも書かせていった。これによって、子どもは自分の考えをより明確にしていくことができた。そしてこれらの二つのことを通して、子どもは「なぜそう思ったのか」「なぜそう考えたのか」という視点で、社会的事象を見たり考えたりしていくようになっていったと思う。

「水道の水はどこから来るのか」という課題では、以下（資料1）のような予想や思い、考えがノートに書かれていた。子どもは自分なりに考えの根拠を示して記述している。

<調べ活動前の予想>

- ・たくさん的人が毎日多くの水を使っているのだからダムに水をためて、それを使っていると思う。
- ・川やダムの水はそのまま飲んだらきたないから、きっと水をきれいにする工場があるにちがいない。
- ・川の水だけじゃ足りないと思うから、海の水も真水にして送っているかもしれない。
- ・水には限りがあるから、家で一回使った水をきれいにしてまた使っているんじゃないかな。

<調べ活動後の思いや考え>

- ・やはり自分の予想通り、水は山にあるダムから来て、水をきれいにする浄水場というところで飲める水にして家や学校に来ていた。1日に金沢全体で学校のプールで660ぱい分の水を使っていることを知っておどろいた。
- ・ぼくは前に、水は白山の手取川ダムから来ていると聞いたことがあったけれど、調べてみたら、金沢のダムからだったので意外だった。
- ・金沢にある二つの浄水場は山の方にあって、これは下の方にある家に送りやすくするためにと知ってなるほどと思った。

資料1 ノートに書かれていた内容

③ 考えを重ね合わせる場の設定

思いや考えを書き表していくことに加え、本小単元では調べてわかったことや考えたことを交流する場も適宜設けていった。お互いの考えを交流し合うことで、事象に対する新たな視点が生まれ、見方や考え方も深まっていくと考えたからである。

「水道の水はどこから來るのか」という課題では、自然の水をきれいにして水道水を作っている浄水場についても調べた。そして調べてわかったことや考えたことを交流する場を設定したところ、最初は「沈でん池というところでごみを沈めている」「ろ過池では砂の層に水を通してごみをとる」といった単に調べてわかった知識の羅列の発表にとどまっていたが、お互いに調べてきたことを述べあう中で、「ろ過池の砂の層は何mあるのだろう」「ろ過池の砂の層がろ過した後のごみで汚れてしまったらどうするのだろう」「沈でん池で沈めたゴミは、その後どうするのだろう」「急速ろ過と緩速ろ過のスピードは、どれくらい違うのだろう」「そもそもどうして、水をきれいにする方法が二通りあるのだろう」など、浄水場のしくみについて積極的に考えていくとする意見や疑問が次々と出てくるようになった。交流によって、子どもは課題を多様な視点から考えたり、調べたことを関連づけて考えたりするようになり、より密度の濃い調べ学習に発展していった。

④ 人と出会う場の設定

本小単元において、我々の健康な生活を支えるために多くの人たちの働きが存在するということを子どもにぜひ実感してほしいということは先に述べてきた通りである。そしてそれらの事業に従事している人々の工夫や努力、願いに触れることで、自分たちが使っている水への关心を深め、水を大切にしていこうとする思いを育んでいきたいと考えた。そのために、浄水場で働くある職員の方の願いと活動を紹介することにした。本来なら、事象に携わる人と子どもが直接会い、自分の思いを聞わらせながら話しを聞くことができれば一番いいのであるが、今回の実践では日程の都合もあって、本小単元の学習中に直接その方から話を聞くことが出来なかつた（浄水場の見学は本小単元の終了後に、学習してきたことを確かめる形で行った）。そこで人と出会う代わりに撮影したビデオを視聴させたりしながら紹介した。その職員の方の願いは、「薬品をあまり使わないで、水ができるだけ自然に近い状態で金沢のみんなに提供したい」ということである。彼によると、金沢の水道の水は原水のままでも充分にきれいなので薬品をあまり必要としない。そしてその人は、そのきれいな原水をこれからもきれいなまま保つ

ていくことが大切であると考え、水源となっている内川上流をボランティアで定期的にそうじをしている。そうじの際には、空き缶などのゴミで2t トラックがいっぱいになり、時にはテレビなどの粗大ゴミも捨てられていたりして、何とも悲しい気持ちになるとのことであった。子どもは真剣な顔で、自分たちの知らないところで苦労や工夫を重ねている人についての話に聞き入っていた。

以下（資料2）はこれらの話を子どもに紹介した後の子どもの感想や意見である。きれいな水を守るためにその地道な活動に共感を覚え、水を大切にしていこうとする思いが感じられる発言が多く出てきた。

- ・ あまり人の住んでいないダムの近くにゴミがたくさんあるのは、わざと捨てた人がいるんだと思う。何でそんなことをするんだろう。
- ・ 净水場の人や地域の人がそのような活動をしているなんて知らなかった。自分も川や山にゴミを捨てたりしないようにしたい。
- ・ キャンプで川とかに行ったら、ゴミがたくさん捨ててあった。キャンプに行くのはいいけど、ゴミはちゃんと持ち帰るようにしたほうがいい。
- ・ 金沢の水はきれいなんだということを、はじめて知った。きれいな金沢の水をこれからも守っていきたい。
- ・ 前に都会で水道の水を飲んだことがあるが、あまりおいしくなかった。薬をあまり使わないようにするために川を汚さないようにしないと・・・。
- ・ 私たちにきれいな水を送るために、浄水場や地域のたくさんの人が働いているので、私たちも水を大事に使っていかなければならないと思った。
- ・ 私の家では、お風呂で使った水を洗濯にも使っている。私も水道の水を出しつ放しにしたりしないで大切に使いたい。

資料2 子どもの発表内容

(6) 単元を終えて

本小単元では「学びを深めようとする思い」として、三つのことを設定した。

「水にかかわる自分たちの生活をふり返りながら、飲料水を確保するための事業について進んで調べていこうとする」については、導入を工夫したり、子ども相互の意見交流を重視し自分の考えを理由もつけてしっかり表現している児童の意見をフィードバックしたりしていくことで積極的な学習の取り組みが見られた。フィードバックについては、今回の実践では、教師から子どもへのフィードバックが主であったが、今後は子ども相互に認め合っていけるような場をもっと作っていきたい。

「飲料水を確保するための事業に従事している人々の工夫や苦労、願いなどについて考えていこうとする」についてはあまり充分ではなかったように思う。これは一つにはこの小単元の性質上、水に関わる自分たちの生活や水が浄水場できれいになっていく様子などに目が行きがちで、そこで働いている人々の存在に気づきにくい面があるからであるが、もっと教師の効果的なゆさぶりの発問なども積極的に入れていくことで働いている人々に目を向けさせることができたのではないかと思う。

「自分たちが使っている水についての関心を深め、水を大切にしていこうとする」については、浄水場の方の話を紹介することで、これまで無駄に水を使ってしまったことを反省したりする姿や、これから水の使い方についての積極的な意見交換の場面も見られ、子どもの中に水を大切にしていこうとする思いを育んでいくことができたと思う。今回の実践では直接その人の話を聞くことは出来なかったものの、自分の思いを関わらせながら、社会的事象に携わる人の話に接していくことは、人の営みにある思いや考え方をたどっていく上で大きな効果が期待できる。今後の社会科の指導計画においても、人と出会う場を単元の中にしっかりと位置づけて、「学びを深めようとする思い」を育んでいきたい。